田口卯吉著

日本開化小史

巻之四

共六

リ伊5
433
4

田口卯吉著

日本開化小史

田口氏藏版

同文會印
門リ伊5
號493
卷4

日本開化小史卷の四目録

第七章
千三百年代ふ至りて日本の文學始りて世に出でゝ事
千六百年代まで文學に有樣
千六百年代の末漢文一變せゝ事
同和文の始めて世ふ出でゝ事
和文ゝ顯はきたゝ想像
千八百年代文學の進歩
第八章
千九百年代文學の大ふ進歩をゝ事

日本文章の基礎立ちし事
編史の体裁改良せし事
法律の成りし事
二千年代の末有益なる著書多く顯はれし事
佛法の文學に効ある事
二千百五十年以後文學次第に退歩せし事
其時々の事情を想見して文學の消長を知る事
想像の沿革

日本開化小史卷の四

第七章

日本文學の起原より千八百年代まで

田口卯吉著

文學とは人の心に顯像なる大凡そ人の心に世に顯はるゝもの其種固に多し或は政治の上に顯はるゝものあり文學とは或は風俗の上に顯はるゝものあり文章の上に顯はるゝものあり其顯はるゝもの智あり情あり情の文章に顯はるゝもの之を記事体と云ふ歴史小説の類之に属す智の文章に顯はるゝもの之を論文と云ふ學文論説之に属す此二者共に是れ文學の本体にして其文章に顯はるゝに至りては互

ふ相錯綜して明に判別そべうらたと雖ども其性質自ら相異なる所あり蓋し論文ハ研究を主とし物の理を說きて以て讀む人の智を服せしむるもの故ふ之我記そるハ人を必ず高尚の智なかるべうらず記事ハ想像を主として物ハ有様を寫し以て讀む人の情を感ぜしむるものなり故ふ之我記そはその必ず高尚ハ情なうるべからぞされぞ智と情との進歩ハ文學の史ハ最も明に示さゞはべうらざる所なり人の心を得て區別をべきものあらを何れも情にして何まで智外りと云ふ境界も知るべからぞ余熟ら其真状を考ふるに心を五官ハ集りふして五官の外ふ心あるとを思ハざるなり然れども今論辨の便ふらんことを求めて外物より感觸を受くるもの感情と云ひ外物を制せんとそはもハを智と云

近代人智発達の有様

志情の有様

ふ今其智情の進むと進まざるとふ因りて人の心ハ有様如何に異ふるやを尋ぬるに初代ふあるてハ人人衣食に急にして物事に研究を經ざる部分多きが為めふ凡そ心ふ解し得ぬ事ハ大うた之を神業に皈そること多し是其智の有様なり又數多の事物に接ずふことも亦く數多の交際をも經ざる我以て其想像淡泊にして味なく迂遠にして曲折少し是れ其情の有様なり文運進歩の後に及ひても人々一事に其心を注き其源因を發見そはふあらばきを安んぜざるゞ為めふ物毎に研究を經たる部分多し蓋し初代の人とても今日の人とても職掌外の事ハ多くハ

世人の言ふ所に信ずること常なれど各自職掌上の事に就て研究に増進するに従ひ世人一班自ら迷謬の事を信ぜざる様になること明らかなり是に於て乎自然の道理を説明する所の學問社會の有様と進捗せしむる論文等出で来るなり是れ智の變遷なり人は源因を探ぐるの心あり野蠻の人は禍災を神業に帰し開明の人は變動を理に尋ぬるが如きも皆理を探るの心ふり此源因を探るを即ち禍災を免れ實利を求めんとの心より生じ生を保ち死を避くるの天性に出づるなり　又交際も漸く廣くなり各種の人情風俗をも見聞するに為めに想像甚だ静かに且つ緻密となりて詩歌小説等に樂しむを趣向出つ是れ其情の變遷なり要するに記事の巧みなるを想像の密なるにあり論文の精なるに智に洽きにあり其精粗巧拙は則ち社會貨財の進歩に従ふものなりて之を以て開化の進不進を徴證するに足るものなり議者或は言ふ詩賦の想像を古に盛んにして後世に衰へ學問の研究を今日に盛んにして古代に欠くと特に知らず両者共に時世の隆盛に従ふて進むものにして詩歌は特に先づ顯はるゝものなれたること我が日本の文學史を見るものは其言の虚ならざるを知らん

二千二百年代に至りて封建亂離の災日本諸州に洽ねくして世の有様彼が如く衰へ亂れたりしうち文學の式微亦た極まれり今更に往時に溯りて日本文學に

源を尋ね其流ふ沿ひ其變遷を探りて二千二百年代よ
でふ下るべし熟く我が國文章の最も古きもの幾尋ぬ
るに千三百年代より以前の事い藐として考ふべうら
ぞ蓋し我國古代ふありて文字なく人々唯く言語を以
て其意を通じたるのみふて彼れ祝詞宣命及び和歌の
類も文學あるに前久しくより行ひ社たるが如し其後
三韓入朝し百濟内属をるふ至りて漢字漸く我國ふ傳
ハり其音を以て其儘に和語を寫そことゝなるを之
を假名と云ふ（呉音先つ入り其後漢音入りしものなり）（山崎美成著文獄溫古事記皆呉音なり）
然れども此時より以後專ら行はし所々漢文を學ぶふ
あるて和語を以て文章を綴ることゝ全く行はれず唯た

和歌祝詞若くハ宣命ふのみ此假名を用ひたるが如し
されど我國古代の文章ハ一て今に傳ふるものゝ實に
漢文を以て始めとす即ち千三百年代上宮太子の十七
憲法こそ最も古きものなるを之ふ次ぎて千四百年淡海
帝の時より以後漢文愈々盛んふなりて此年代ふゝ近
江朝廷の令太寶令古事記（太安麻呂撰）日本書記（舍人親王太安麻呂清人等撰）養老令の撰あり千五百年代ふ至りて續日本記（菅野真道藤原継縄）大同類聚（醫書）古語拾遺（齋部廣成宿禰）新撰姓氏録（萬多親王）令義解（清原夏野等）性靈集祕藏寶鑰（空海の撰）懷風藻（近江朝廷より奈良朝の末まで）の詩集なり（撰者淡江三船なるべしと云へり）文華秀麗集（撰者詳ならず亦詩集なり）經國集（良岑安世滋野貞主等の撰ふして千四百年代より千五百年代の末に至る）千六百年代に

至りて日本後記（藤原冬嗣等）文徳實録（藤原基經）續日本後記（藤原良房等撰）
三代實録（藤原時平）内裏式（藤原冬嗣等）類集國史（菅原道真）弘仁式（藤原冬嗣）
貞觀式、延喜式、本朝文粋（藤原明衡）の撰あるに至りて我
國の文學始めて顯はると云ふて可なる蓋し史を紀し
事を論ずるは人心進歩し成績すること之れ其以前に比
すれば大なる懸隔あるべしと雖ども時世の幼稚なる
に當りては其成績の美を見る甚だ難しとせざれば夫
の千三百年代より千六百年代に至るまで編纂せられ
し史類を閲するに其最も意を注ぎたる所は歳月時日
に詳密、神祇の祭祀、赤雪、白雉の發現等の類並に其外當
時の人心に心ぜし祥瑞妖孽と認めたる事件を統記し

たるまでに止て絶えて事件の要不要を識別し取捨筆削
の智を用ひざる所なきが如し故に後世の史家が認め
て以て編史の要點とせざる一事件と他の事件との
關係を示す等の事すら絶えて心付うばりしのみならず
彼の支那の史に多く記する所の一人の品行性質に
公衆に及ぼしたる影響をも記すること事々唯く面前
に顯はれたる事件を其儘に記載するに止まるのみ而
して其如何なる事情よりして起りしか手に至りて著
者全く注意を欠く蓋し社會事多し史をもの唯有要
の事件を記するに止まるべうらぞ然るに當時の史
更に之を削ることなく苟くも事あるを云へば人事に

年表と歴史と

關係なき事までも之を記載し唯だ卷帙の洪漸なる代以て功績あるを心得たるが如きを實に惜むべきなり要するに是等の年表にして歴史にあらざるなり史を紀するに於て此の如き故に事を論するに於ても又其弊を免れぬ蓋し人の事を論せんには先づ一箇の定説なかるべからざることを論を俟たざるなり然るに古人の序文若くは論文或書を見るに已れ先つ一己の定見あるを而して后筆を執るに為めに大うたる四六の句、排偶の文体以て外部より議論を引出す或勤めたるが如く抑も文學は人の心を顯すものなり人の心固より四六を以て量り得るものにあらず天下の事物亦初より排偶より成らずされば満胸の議論或吐露せんと欲するに必らず心を導く處に従ひ決して文章上の法則に掣肘せらるべからざること理の當然なるが如く議論なくして之を記すべき故に法則の手引に依りて言ふべき事を思ひ出さんとす其体決して眞体にあらざるなり之に加ふるに至難の文字を連ねて強ひて古語に博さんと誇らんと欲するの弊たり夫れ十分議論あるを之を記するにそは古字を用ふるを解し難きものに引かるる初めより言いんと欲する主意なくして強ひて古字を用ふるに於て豈に高論を聞くを得んや是蓋し人心の未だ進まざるに當りて至難の

外國語を以て之を文章ふ顯ハさしめたる所ふり唯僅ふ小三好清行、菅原文時の二封事の見るべきあるのみ

然ども文學進歩の勢ハ永く文体ハ渋滞を以て得て抑制そべきふあらず千六百年代の末より彼のうたくるしふ漢文の体々漸く日本の語法と親和し稍々人々ハ自由に記載し得るハ体を得るふ至れり彼の將門記、純友追討記の如き其文体今日より之を見ば極めて奇異にして驚くべく笑ふべきものあれと雖ども之を彼の法則に拘束せらるゝそは國史論文ふ比それぞ自ら其意伐述ふかに滑うなる姿あれ且つ此等の書ハ決し

て巧と稱そべきふあらずと雖ども稍々人の動作より世の事情を述へんと欲そはふ適そるあるぶ如し此變成の文法終ふ一箇の体裁を為し書翰の往復日常の日記等ふも此体を用ふる事となるに之伐日記体と云ふさ社ぞ是より文章大ふ世人に親接し漢文を以て歴史を書し格式を書そること漸々全く衰へ一ふ此体を以て記載そる事とふ社り其最も大なるその九歴記、權記、岡屋關白記、小右記、春記、水左記、經信卿記、長春記、台記、山槐記、未海日次記、吉記、明月記、王華殿記、三長記、の類ふして之をよむふ味ふく其体俗醜を免れず其書中或ハ後世史家の撮摘を要そべき事件を記さべるふあらぬと

雖ども之を要するふ古人筆削の智なく凡そ耳目に觸るゝ所の事の要不要を問ふそ皆之を洩さゞるを務むるの姿なる況以て其文体の稍〻自由を得ふ及んで却て無用の事のみ多く記載し讀むもの之をして當時の事情を知ふ苦ましむるに至るの斯く漢文一變の時ふ當りて日本の語法を以て文章を作る事漸く世に顯ふるゝに至るとしハ真ふ日本文學の幸なるとし蓋し和文の最古きもの況云はゞ古事記ふ如くなるはべし然れども其語や固と古語にして既に當時の語にあらず當時の語を以て記載するに至りしと平假名片假名の發明あるとを以て和歌を記すことと

大ふ行ふ社歳月の久しきを經て世の習俗に親和し終ふ日常の言語を筆に寫すに至るとし時に在りと見るたり千六百年代の中頃より和文を以て紀行或ハ小説の類を記すふを漸く起るり今其一二を示さんふ千六百年代に伊勢物語（作者業平朝臣なりと云ふ）竹取物語（作者ハ源順ふりと云ふ）説あれども證ふしし土佐日記（紀貫之の作なり）菅家の作ふりと云ひ傳ふきども確うならず宇津保物語（作者確うならず）大和物語（作者滋春とも華山院とも云へり共ふ確うふらず）の類出でそり千七百年代に至りて落久保（作者源順と云ふも確うふらず）濱松中納言物語、源氏物語（藤式部の作）狭衣（大貳三位の作）泉式部物語、とりう忍ぶや（作者詳うふらず）枕の草子（清少納言の筆）松島日記（清少納言の作と云ふ確うならず）紫式部

日記（藤式部）蜻蛉日記（右大将道綱の母）の類出でたり是時ふ至りて其用語漸く廣く其文字漸く艶ふ春宵秋夜の眺を記し少年佳人の情況寫そこと眞ゝ細うふ且つ巧みを添へたり嗚呼文字を以て事を記し且つ論ずるゝ至難の業なり然きども自國ゝ言語を用ひ自國の語法を用ひて之を書そるふいうでう其心の働を顯ゝ之に至らざらんや千七百年代の和文ゝ真ふ我ゝ日本人心の曙光ふして恰も矇昧の雲霧を開き晴明の影を現そゞ如し寔ふ目覺ましく見えまゝ

蓋し文學ゝ史ふ文章の和漢を撰まゞ唯だ其主意趣向の巧ふして味あるをこそ取るべきゝ彼の漢文ゝ論理なふ体を讀ゝ来りて和文の有様を顧みゝゞ其事の顛末あゝ其語の味ある固より數等の上ゝあゝと云ハざゝを得ゞ然れども不幸ふして和文の起源ゝ多く婦女子の手にのみ成り男子ゝして之を記ゝ伐賤しみ嫌ふの有様ふりしうば文章ふ最も必要ある精神を欠き且つ其語句冗長ふして各異の事情ゝ乏しく徒ゝ一様なゝ有様を記すのゝふりき彼の物語ゝ諸書の如き當時の幼稚ふゝ時代ふあゝてハ極めて巧ゝにして且つ其進歩も極めて速うふりしこと疑を容れゞと雖ゝも活潑の氣力もなく又人の注意伐促ゝべゝ有様の變化もふゝ々當時人心の幼稚なるふと伐示ゝ明證ふゝ

べし。蓋し小説の味々各種の状態を集むるにあり文章の巧ミ々抑揚頓挫の其節を得るふあり然るに此物語の如き々多くハ唯優遊閑暇なる雲上人の癡ゝ戯有様を長ゝしく編りまるまでふて其他を記すことあるなし。嗚呼文學ハ人の心状顯ハるもの好色ゞ藤原氏以来の柔弱なる習俗を以て活潑敏捷の文章を得んこと固より望むべからざると雖とも其文の氣力ふ亦驚くふ堪へたり夫の源氏の如き狹衣の如き優美の情極めて多し。と雖ども決して此弊を免れざるなり。蓋し人智の進むふ従ひ用語の愈ゝ廣く文章の愈ゝ精なること自然の通理ふる我以て用語の廣く文章の愈ゝ精なるを見ハ直ちふ認めて以て人心の進歩せること証ふ証ふ妨けふるべし。千八百年代の以前に於てハ漢語の用法尚ほ未だ日本の習俗に親和せず而て漢語和文各ゝ分離の有様なりしが歳月を經るふ従ひ漢語漸く世俗に浸染し千八百年代の末千九百年代の初めより彼の所謂和文中に漢語と交ふると愈ゝ多くなりたり此時に當りて漢文の變体なる日記体ハ愈ゝ日本の俗語に和し日本の俗文ハ亦漢文の句調ふ近似し其間自ら一種中間の文法を生ずるに崩芽を發せり余々之を日本文と云ふ即ち當今まで用ひ傳ふ文章を云ふふり千八百年代の末榮花物語と云へる一

書四十巻世ふ出でたり其著者藤原為業なるとも云ひ又
た赤染衛門ふりとも云ふ確うならぬ千九百年代の始
めふ至り續世継十巻世ふ出ぐたる其著者亦詳かならず
其他藤原通憲ぶ本朝世記三十巻を著ッぜりと云へども
惜むへし今ふ傳ハらず是數書々實ふ我ぶ國ュ於て日
本文を以て歴史を記載ちふの濫觴ふり蓋し物初め
ちう完全ふうを得ぞ前の二書ハ如き未だ彼の冗長ふ
ュ物語の文法を免うれぞして其編史の体を恰も彼の
物語ふ於々ふが如く月の宴ゲ霧雲井、子の日、を つ春等
の題目ハ掲げて篇くを區分したュ者ハり且つ其記ュ
せし所も重えふ帝王の遊宴大臣の榮華后妃の入内等

の有様と記ュし其間ふ和歌を交へ以て女こしふ状態
を寫せしものなうされぞ其意ハ注きし所決して國家
有要の事件と稱そべうらぞと雖ども之迄ハ何事も差
別なく混合ちて記載したュ六國史等の錯雜ふうたル
それぞ稍く選擇の智を存すと云ふべし且つ當時の情
勢をふ王室優柔の極なうハ以て所謂政事上の重もな
ュ事件とちて人目ふ觸ュ所も遊宴漁色ふ過ぎざうや
も知ュべうらぞ今之を記して後世の史家をして古情
の一斑ハ窺ふを得せしめ且つ將來進歩ハ第一楷梯を
構成そはを其功極りて多し
王朝の時ふ當りて唐人の説大ふ我國ュ行ッれ學校を

建て學士を優遇する類の事は仁政なる美舉ふりと
て稱賛する社所謂聖人の道を政府自以て教育を保護
そふあるが如く見做せしものと思ふ近江朝廷れ
時千四百年代始めて學校を建らき奈良朝に至りても諸國
ふし學校を建らき且つ大學寮を設ゝて之を式部に管
せられそう（當時漢文を讀むに赤だ片假名の發明ふき
が為りふ和讀にそをこと點と云へつもの
を用いたりをこと點とそ●或ハレ或々〳〵或ハ〳〵或ハ
一等の點と漢字の四隅上下ふ附して其働と顯ハそな
り漢々漢をと讀ミ漢ハ漢さい讀むら如し此是より以
方々片仮名の行はれし後ち廢きりとぞ）
後歷朝金銀田園等を學士ふ給して文學を奬勵し給へ
り之を學文料と云ふ又燈油料火の望等の名あを桓武
天皇都を平安ふ遷し給ひし後ち又學校と之に建て教

十二経

師と唐より迎へ又た學士を彼國ふ送り給へり是より
大江菅原の二家起りて專ら學事を管せり其外貴紳の
學校又多し弘法大師の綜藝種智院檀林皇后の學館院、
藤氏の勸學校源氏の奬學院等一時盛んふりき其勉學
そは所の經籍々毛詩尚書禮記周易左傳（五經と云ふ）周禮儀
禮公羊傳穀梁傳（以上之を加へて九經と云ふ）論語孝經老子莊子（以上之を加へて十三經と云ふ）是きなり王朝の文學を奬勵し給ひし事至
れりと云ふべしさ社ぞこそ其時世の疎野なりしふも
得似ぞ六國史其他律令格式の如き浩瀚の書類を編む
事をも做し得たるべし然きども人智の度ふ至りてハ
必ずしも政府に奬勵ふ由りて增進そへきものふあら

ざれぞ今に至りて見るべきそのこと唯だ淺薄なる大冊の高閣に堆きと見るのみ抑も學士とはものは何が為うふ他の職工よりも重んぞへきう文學ふる者ハ何が為うふ他の貨物よりも尊ふべき乎其功績の人類に及ふ所如何ふ相異なる乎余を以て之を見ふ更に貴重そべきあるを見ざるなり然り況んや徒に古字に通し古書に明らかなるのみは學士をや抑そ人心の進歩ハ貨物の進歩と併行そべきものふきぞ今其貨物の進歩と妨々て特ふ文學のこを感んならしめんと欲そはこ恰も車の兩輪の一を退ぞて他を進めんと欲すふふ異からぞ其目的を遂ぐることを能ハざるなりはきぞ見

るべし王政の柔弱ふ歸し學士を保護そは能ハざるふ至りて我國の文學漸く獨立の萌を得其將さふ傾覆せんとするの時ふ至りて始めて見さへさの書あることを之を自然に任せるも何ぞ文學の衰零を憂へんや況んや自然に任して衰ふるもはぞ即ち人世ふ無用なる明證なるをや

第八章　鎌倉政府創立以後戰國ふ至るの間日本文學の沿革

千九百年代ふ至りて我國政事上に起りたる事件即ち鎌倉政府創立の一事ハ文學の上に於ても非常の進歩を促せしもなれなり蓋し天下非常の改革々非常の感觸を人心ふ来さゞハ能ハ得ぞ熟く此革命の成跡を考ふるふ其及ぶ所特に政府設置の場所を關東ふ轉移したるのみに止まらず上に帝室專有と思ひ來りきたる政權も自ら帝室を離れ去りて武臣の手ふ歸し下々萬民管理の職ふ任じ地方ハ事務を理めたりし國司も其權を殺ぎれて地頭の威權諸國ふ興立したりしうぞ此世運の移轉ハ際ふ立てるものハ其方向ふ迷ひて驚駭せざ

ることを得ざるべし殊ふ其以前より例し少なき事ども多く政事ハ上に出來て一天萬乘の尊きも數く幽囚の辱を免れ給ハざりし類の珍事續くとして踵を接せしうぞ太平ふ慣れ榮華に酖ふりし都人等如何でか恐怖せざらんや此時に當りて夷と賤と慣れたりし東國の男兒々都に攻め入り都の人々關西ふ追ひ其他人民の移住諸國の間ふ起りて人と新らしき風俗を見新しき言語ハ聞くふ至まり抑も人智々物に接するふ長し人情々事に觸るゝふ精きもれるまぞ彼の數百年来依然として運動なき有樣ハ見しし人こゞ此新らしき世間の現像を目擊するふ及んで自ら數多の元素ハ胸中

に貫徹せはふくんばあらざる此元素や則ち鎌倉政府の勤謙なる政務の下に愛育せらるる爛熳たる花を開き馥郁たる香を發するに至りし事誠に時日を費さざるも千九百年代の中頃に至りて大鏡水鏡の二書世に出て之り此二史の如きを大に歴史の体裁を簡明ならし後の世の人をして古代の沿革を知り易からしむるに好書なるを蓋し此書未だ決して國家の有要なる事實を記せるものと稱すべからざる又決して事實と事實の關係を記せるものにあらずして徒に帝王大臣の歌或詠ぜる詩を吟せらるる事ども或記を以て一篇の本主と為すが如きを免れざると雖ども之を彼の千八百年代の

末千九百年代の始めに顯るる榮華物語及び續世継等に比するに編史の体裁大に備はる所あるを即ち物語の体を免れて歴史の体に近似するを見るべし蓋し榮華物語の世に出たる頃すでに我國に於ては正史を記するに必らず漢文を用ひるを以て漢語交りに和文を以てせし事絶えてなし和文を重ぜる草子物語の類を記するものみ用ひたる習俗なりしに榮華續世継の記者が此文章を以て歴史を記するに當りても自ら嚴格の体裁を用ひるまでに勇進し難きの事情やあるを々ん優雅なる題名を掲げて篇章を區分せり然れども此二鏡の顯るる頃に至りて世の勢既に正事實

のもはまでも此文法を用ふる有様となるべしうば斯く治世の順序を逐ふて歴史を記ふを敢んぞ出ふ至りしものと見えたり是き以て時世の進歩を知るべし

之ふ續きて葉室大納言時長の著せる保元物語、平治物語、源平盛衰記（保元平治二物語々語句軟ふして漢語も亦少ふ而して源平盛衰記々稍こ漢文の口氣と帯ふ故ふ二書同一の手ふ成ること疑ひなきふあらそ然れども今群書一覧ふ據りて其作者を葉室時長ふ帰そ）及び信濃前司行長ふ著せる平家物語の數書世ふ出てたり此二氏の記そ所を見るふ行文の巧ミふるふと体裁の具りそふとに於て遥ふ千八百年代の諸書ふ超越そはのみふらそ實ふ後世ふ史家として長く之に據て編史の術を試まむるふ基を為せり蓋し文學の進歩々文体の自由を得て十分ふ思想を吐露せしむるふ因ふなるべし而して文体の自由ふ得たる言語の増加を以て第一の助とそ漢語の和文ふ入りしより文章の用語大ふ増加し行文ふ自由を得るふ至ると雖ども千八百年代ふあるて未た十分ふる親和を遂々そして自ら分離の体ふきふあらず然るふ二氏出つるふ及んて漢語を以て活潑勇壮ふる状態を記し和語ふ以て幽鬱悲哀なる有様を顯はし相交へて以て色ふ趣きを寫し之を統ぶるに文章ふ最も有要ふる想像力を以てせしうで無限の情趣毎句ふ間ふ存して誦讀ふ際自ら甘味の湧出そふの思あらしむ是ふ於てう我國

の文章漢語和文の間に胚胎して始めて當今日本文學の基礎を固ふせりと言ふべし

然れども二氏の日本文學に大功あるを決して其想像力の緻密なるとと文章の体裁を修正したるとに因るにあらざるべし彼の世に所謂記事体即ち事實を因りて統記されし文体を以て歴史と記載せし事是なり抑も歴史とは事實を記すものなり故に事實の種類を因りて沿革を示さざるべからず然るに我王政の時は編年の体即ち年度を以て事實を類別せるの文体行はれて全く關係なき事實をも年月さへ同じければ之れを一文の中に混記せり而して其年月浅詳なるを

帝國文庫之印

々史家の最も精神を籠めし所なりき故ぞ當時の政事の有様如何なりしかを聞うんと欲せども全く之を記さざるのみならず其記せる所の事も其緒だに見出すこと甚だ難し唯菅公の類集國史のみ稍々其緒を見出すに便を與へて人をして其卓見に服せしむるものあるとと雖も其記せる所の事實々矢張國家必用の事にあらざりき然るに二氏出づ及んで年月の古今に關せず事柄に從ひて類別し之きを記載せしうで數代の事件自ら一讀の下に瞭然たるを得たり嗚呼天下の事多し其沿革一々相異なり之を述べんと欲ぞ決して編年の欄中に嵌入すべう

らゑ二氏乃ち其約束を解き人心伐〻して自由ふ發露せ
しむ其功多〻と云ふべし且や此數書の著り社〻しきを
歴史漸く和歌の端作りの如き体を免れ政事上の事件
を記すに至れり又人の品行言語ハ政事上ふ及ぼせる
事どもを記せり此体裁ハ一たび世ふ出てしより以後
數百年間の史家皆之ふ據りて以て當時ハ時情を記載
し後の世ハ人をして興廢存亡の理由を窺ふを得せし
めたり其功多〻と云ふべし〻されど見るべし我國の歴
史ふ於て政事上並ふ人民の有様を詳ふ知ることを得た
るハ實ハ保元平治以後の事ふかことを
鎌倉政府の治世ハ斯く編史ハ体裁と行文の方法とふ

於て大なる進歩を示せしのみならず實ふ法律の點ハ
於ても亦後世の模範となるべきものを發出だせり蓋し
王政の時ふ當りて制定せられし法律ハ全く唐の制度
を移し〻ものふて果して能く當時の習俗ふ適合せ
しや否ハ今之を知るに由なし然れども武人地方ふ群
起し封建の元素を形成するふ及んで其法律亦た地方
を制するふ足らざりし事ハ前ハ述べし所ふて詳うな
るべし鎌倉政府の時ハ至りて即ち其習俗ハ因る所ふ
從ひ法律を編制し以て國体を固くせ貞永式目則ち是
なり此法こそ我が國ふおきて始めて自國の習慣ハ基
きて制定せるものふして能く時世ハ適し後の政府

までも長くこゝに據らしめたるは編者の榮譽多しと云ふべし

鎌倉政府創立の始めゝ當りて文學の進歩此の如く著しかりしゝは其治世の間世に顯はれたる書籍皆見るべきもの多し今其一二を擧ぐんに承久記（著者未詳）今昔物語、古今著聞集、辨内侍日記、讃岐典侍日記、源親行の東關紀行の類は或る政事上の得失を議し或る數多の奇事を纂集し或る佛理を演述せしものにして凡て見るべき意見を存せり而して其文章は乃ち和文に漢語を交へたるものにして其体裁亦た趣きを同ふせり

然れども是時漢學より一變せし日記体の文尚ほ行はれざるにあらず彼の愚管抄、愚昧記、玉海、玉藻明月記、山槐記、平戸記、東鑑、百錬鈔、仁部管記、吉續紀の類々朝廷若くは鎌倉政府の官吏に手に成りたるものにして往時の紛雜なる体裁を存し更に改良せざるものあるを見ばなり又日蓮上人の註畫讃、親鸞聖人傳繪及び元享釋書、年中行事の如きも皆此体を以て記せりされど當時と雖とも公けに尺牘日記等々尚此体を用ひそはこと能はざるべし唯だ其愈々和語に親和したる有様を見るのみ

蓋し人智の未だ進まざるに當りてや自然の道理を講究し人類の幸福を増進せしむる類の事々未だ十分に

行ハれぞして却て人心を恐怖をしむる事件ハ人心を集むること多しさればぞ太平の時ハ當りて世に顯ハれたる事件々常ハ曖昧の内に埋もれ却て鬪爭戰亂の際に當りて人を殺し城を攻むる勇將猛卒の武者振のみぞ史上ハ詳ふるゝ諸國の歷史其揆を同ふせり鎌倉政府の治平幾致そを百五十年其間執權並に評定衆の智略あり功勳あり事々古史ハも數ゑ述ぶ所多して且つ足利將軍の時ハ至り大に武人の羨慕する處きり事々當時の史ハ見ゆ然きども此平和ふる行ひを當時の史家ハ目を注ぎし所ハらざる幾以て如何なる政道なりしを如何ふる文動なりしかを今日ハ詳ふハ

する能ハざふゝ寔ハ惜むべき明り此一事以て鎌倉時代ハ於て文學尚ハ未だ民間に洽ふらぞ人心の度未ぞ進まざりを知るに足るべし

こハ有樣を以て日本の文學殆んど百五十年ハ太平の雨露に浴きし後再び政事上の動搖出來て鎌倉治世の文學の最後ハ光耀を發せしめたり是ハ即ち二千年代の末元弘建武の爭亂ふり蓋し前文ハも略ぼ說示せし如く戰亂々到底文學を進捗をしむるのふあらぞと雖ども多く人心を蒐むるの事件ふる幾以て其時代に適ちしハ進度ハ著書多く此際ハ現ハるゝことなりされぞ元弘建武の亂起ふハ及んで鎌倉時代ハ養成し

たる文學の種子ハ更ニ熟練の香を添へて世ニ咲出て
そう今其最も著明ニして且有益ふかきものを列記せん
ハ増鏡（一條冬良の著なり前の大鏡水鏡と合して三鏡と稱す）保暦間記（未詳）神皇正
統記（源親房）太平記（作者極め多し）園太暦（太政大臣公賢）船上記（未詳）伯耆
巻（未詳）闘城書裏書（未詳）皆な見るべきの書ふり其述ふる處
々多くハ戰亂の有様若くハ帝統將門の確執等を記ス
るに止まるとも雖ども其間或ハ政事ハ得失帝統の正潤
並ニ公家武家の盛衰ハ基く所を論ずるもの多し其記
者の智力相同ーからざるも其議論素より功拙なきにあら
ずと雖ども其文体ハ則ち盛衰記平家物語等と同一の
そのふて稍く漢語を交ふるの多きを見るのみ就中太

平記の如きハ之を用ふる事極めて多く稍く博きに誇
るの姿ふきふあらざるを要するに文章の點ハ於てハ
未だ盛衰記平家物語等と輕重ーし難しと雖ども其眼目
の注く所ハ至りてハ當時の書却て往時より勝る所あ
り就中正統記の如きハ日本古來ハ沿革を統括し國家
有要の事實を網羅して殆んと遺ス處ふし其王家ハ衰
頽武族ハ興立等ハ注目し其源由を推究するが如き真
ふ得がたきの書と云ふべし蓋し我國ニ於て社會の有
様ハ記し其變遷の基く所を論ずる書籍實ふあること
ハ盛衰記、平家物語の如きハ其文体極めて巧みふり
と雖ども著眼の鋭なるふ至りてハ遥ふ之を二千年

代の末二千百年代の始めに顯はれ諸書に讓らざるを得ぞ而して正統記を實に鋭の鋭なるものなり之を後世の歴史に比べれば其議論尚ほ議すべき處多く其体未だ備はらざる所あるとは雖ども二千年代にて此書あるを以て當時の文運を後世に誇稱するに足るなり

此時に當りて隨筆の書亦た見るべきもの多し明恵上人のぼろ〳〵草子兼好法師の徒然艸の如きは議論も高尚にして如何にも手際なる書体なり而して其論稍く心理の事に及ぶ所あるは實に日本の文學飾るべき一具と稱すべし又程朱の學も此時始めて我國に傳り玄

恵法印之伐學びしと云ひ傳ふるは我中世文學の最も感んなるべしこの此時に當りて云ふも誣言にあらず蓋し學問上の研究を人心の中に發するに事は後世開化の結果にして經驗少き世にも絶えて現はるざる所なるに雖ども彼の想像力に至りては早くより人の心に結ぶもれなるは鎌倉時代の諸書中にも智慧伐進むに資料に至りては殆んど之伐欠くと雖ども情を動かすの趣向に至りては既に大に文章上に現はるるに其所謂進歩ふるものも實に其想像の増進に外ならざるべし當時の史を記し事を論ずる伐見るに多くは皆無常を觀し物の憐を說くこと多し抑も此想像は全

く佛法より由来するものふて王政の時より未だ十分ふ文章上ふ顯はれざりき源氏狹衣、榮華の如き艶ハ則ち艶なりと雖ども未だ悚然として恐るゝの想像少く此想像源平盛衰記ようを起り平家ふ至りて最も盛んなり太平記、徒然草ふ至りて極めて密ふり、其他神皇正統記の博識ようて卓見ふる保曆間記の簡單ふして靜肅ふも佛法の想像ふ至りてそ自ら全篇ふ貫通するもれあるが如し抑も此の如き所以のものを王政れ時より佛道久しく人心ふ浸染し鎌倉政府の時ふ至りて禪學愈〻盛んなるを為めふ文學の上ふ大に顯るゝふふ至りしふり而して我國の文學此想像れ為めふ裨益を

得たること少くふあらざるを鎌倉政府既ふ亡び封建武族の海内ふ割據をしより世の中次第ふ衰へ亂るゝに及ぶ文學も亦隨て退歩の姿となり然れども二千百年代の中項即ち足利氏治世の始めふ當りて鎌倉以後の文物尚存するものあるを以て文學れ見るべきもの少なからず南朝の末路ふ當りて世ふ出でたる櫻雲記、續神皇正統記、南朝記傳、梅松論、吉野拾遺の如きい前の諸書ふ及ぶこと所多しと雖も其文法整ふ所あるを以て當時の事情を詳ふするふ必要の書なりとさるべ此時ふ於て未だ遽ふ文學衰零せりと稱する能はざるものあり其後封建潰裂の

勢ひ日ふ月ふ増進し世の有様益〻危殆ふ迫りしうば
當時ふ顯ハ社そる書も從ひて情味を失ひ其文章愈よ
枯燥そるふ至れりさきぞ應永記ハ明德記より劣り嘉
吉記そ應永記よそ劣れり其後椿葉記鎌倉大草子此書ハ稍
く見るべき處あり應仁記の類あると雖ども皆文意の明らならず
さるもの多し要そるふ二千百五十年の頃より殆んど
百年間文學次第ふ退歩の姿を示せり真ふ歎ぞべきこ
となり蓋し斯く文學の衰微ふ至るも彼の王政の時ハ
如く外國の古語ふ汲くさして人間天性の智力を働う
ゑむふ能ハざりしふ如き弊風の行ハれしふあらば其
文体の自由を極めたること恰も鎌倉時代と異ふる

なる迄ども唯人〻安然として思想を此點ふ注ぎ難き
世の有様とぞりしぐゆゑなり嗚呼海内麻の如く亂逆
群雄割據そはの世ふ至りて人民豈ふ文學に事とする
の暇あらんや則ち天然ふ打ち勝つハ志ハ去りて敵を
亡ぼそハ略となり筆硯ふ親しむの樂を散して奮戰鏖
殺の怒りとなるふ茲ふ至りて終ふ文學の光を東洋孤島
の内ふ滅せり嘆そるに勝ふべくんや
思ふふ文學の消長を知るそ其記ふそ所の時代ハ様子
を想見すふふそ便利ふるべ〻ハ彼の源平ハ戰南北朝
の爭ハ有様を思ひ見るふ關東武夫の勇きしき王都の
小婦の美しふ其他攻城野戰の篠木を削る駈引きて顔

前ふ見るが如くに思ふふ、ふあらそや去りて應永二千零五十九年　嘉吉二千百年の世れ亂れ海内湧くが如きふ至りて如何なる將士ぞ智略あるべしう如何なる武夫ぞ猛勇なるべしか思ふに武勇の氣當時ふ減ぜぞ鬪爭射擊の術古より拙なからず殊に此時とても秀才佳人の全くなきにもあらず唯た其き文學の衰へるぞ為りふ其人柄の慕ふべきふく事跡の好みそべきを見ざるふるべし是社以て文學の盛衰を證そはふ足るなり

以上に於て略ぼ文体の變遷と智情の盛衰とを通覽したきぞ更ふ古代に回顧して文章上ふ現れたる氣風を一見そべし蓋し往昔千三百年代より千五百年代に

至るまで漢文のみ世ふ行なれ文章上研究想像の行はふ、とるく唯く渾沌として智情の未たかうれざる姿なりき是き蓋し幼稚れる精神を以て至難ふる外國の文章言語を記臆せんと勉め絶えて其他を顧みる能はざるぞ為めならん千六百年代ふ至りて日記体及び和文の二者出来て稍て人心の一斑伺窺ひ得べきふ至きり今當時に顯れしは想像を竹取うつぼ等に就きて考ふるふ其感情全く當今の人情ふ相違し恰も異境ふ入り異人ふ逢ふの思あり如何ふれぞ斯る想像の心裡に發そるやと疑ふふ、程ふり蓋し當時の人未だ多く事物ふ接きぞたて其想像精密ならざるぞ為めふ自

ら世ふあを得ぬ想像の胸裏ゝ發すはふゝべ〜故ゝ其文も亦た素樸ゝ〜て更ふ味ひゝ〜然ゝふ千七百年代の末ゝり文弱の氣風都の内に發生〜滿堂婦女子の如くなをふたきぞ其文章稍く猥褻淫風の加あふ彼免ゝ社そと雖ども亦自から艶美の情味を添ふゝゝ至社を而て千九百年代ふ至りて關東武夫の氣性漸く世ふ顯ハ社きれぞ活潑勇壯の氣又文學の中ふ加ハりたり是き即ち盛衰記、平家物語の氣と優と彼兼ね之きを讀ミく樂ま〜き所以ふり是ゝを天下治平を致を事殆んと百五十年、人智始めて社會の大勢と見ゝと知る、故ふ時勢論漸く文學の中ふ參入〜て文章自ら靜肅完備ぬ体

を致きり、是則ち保曆間記、神皇正統記の自ら精神を存〜而ちて嚴格の体あゝ所以なを其後ふ至りて武人擅横の世の中と成り下を殺伐鬪爭の災世雲を蔽ひ〜ゝぞ文章紛雜の姿となりて終ふ全く情味を失ふゝ至社り然きども之あゝ猶可ふり二千二百年代の末ゝハ全く之を失ふふ至れり豈ゝ哀〜ゝゝぞや嗚呼我國文學を史上ふ見ゝ近〜と為そべゝゝゝ然るふ王政の時之を保護ゝ失〜强ひゝく日本の精神を驅を外國ぬ文章と古語とふ注き之を〜て十分に發達すかと得せ〜めぞ鎌倉政府の世となを日本の文學ハ最も便利ゝゝ文體を求めて發育〜終ふ我國文學の基ゐを立て〜

と雖ども又久しからずして封建亂離の世となり文學も亦世事紛紜の中に滅えはふ至れども應仁の亂より以後德川氏の天下を制するに至るまで殆んと百五十年間文學更に再興の勢ひなし唯た武人鬪爭の慘狀を見るのみ

物の理を究め其功用を知らんとするを固より智力れ働きふして研究の部類に屬するものなれども其理を究め其功用を知るの後さてこそと感ずるの感情に至りてを即ち想像の部類に屬するものなり之れ例へんに諸業無常是生滅法と云へる語の如きハ萬有の理を說明したるものなれども其

理を心に悟りて人生の墓なきを觀ずるに至りてハ即ち是れ想像なるされど研究と想像とを其性質大ふ異なれども其相移るや恰も比隣の如き處あるふり研究の淺き時に當りてを想像も自ら淺く研究の進むに至りてを相像も進みて高尚になるより彼の赤壁の賦に西望夏口、東望武昌、山川相繆鬱乎蒼々、此非孟德之困於周郎者乎と云るが如きを往時を追懷をの智あるふにならば感ずる所想像則を又客亦知夫水與月乎、逝者如斯而未嘗往也、盈虛者如彼而卒莫消長也、云々の如きハ理我解をるふあらざれを感ぜざるを想像なる徒然艸に「あだし野の露きゆる

時なく鳥部山の烟立去らで住みこつさならひふらバ如何ふ物のあり社もふうらん」と云ひ又「花ハさかるふ月そくま明ゑ紙のこ見ゑ物うこ雨ゑむりひく月をこひ考社ゑりて春のゆくへこちらぬをなかあはれふて情ゑかし」と云ふが如きも亦た十分ふる研究明くして能く言ふ尽き處ふあらず故ゑ最を巧みふる想像を述べんと欲ちぞ最も研究を博くせざるべからぢ是れ想像と研究と文學上ふ於く相待つ所以なを

日本開化小史四の巻終

明治十一年二月廿六日板權免許
同十六年三月六日再板御届
同十六年三月出板
著述兼出版人　東京府士族　田口卯吉　東京牛込區牛込北山伏町四十三番地

東京書林賣捌

日本橋通一丁目　北畠茂兵衛
同　通二丁目　稲田佐兵衛
芝三島町　山中市兵衛
浅艸茅町三丁目　北澤伊八
小石川大門町　青山清吉
日本橋通三丁目　丸屋善七
同　通二丁目　小林新兵衛